ぶんけい
教育 ほっとにゅーす
かわら版

教育の小径（こみち）

No.217
2026 November
11月号



(一財)総合初等教育研究所参与
北 俊夫先生



今月のことば

今昔の感（こんじゃくかん）

今の様子を昔と比べたとき、あまりにも様変わりしていることに対していだくしみじみとした心もち（感慨）のことをいいます。

小中学校合同の授業研究

●各地で小学校と中学校の合同の授業研究が実施されています。日ごろから交流がない場合には、戸惑いや相互不信など実施上の課題が多いようです。

●授業研究に当たっては、お互いに実施教科の指導内容や教材について理解を深め、協働して学習指導案を作成して実施します。

今月の記念日

11月22日 ボタンの日

明治３年（１８７０年）のこの日、ヨーロッパ式のボタン付きのネイビールックが日本海軍の制服に採用されたことを記念して、日本ボタン協会などが制定しました。

どこに問題があるか

「小中一貫教育」が課題になって以来、各地で小学校と中学校の教師が合同で授業研究に取り組む機会が増えてきました。具体的には、小学校の授業を中学校の教師が参観する。あるいはその逆です。授業を相互に参観することがほとんど行われてこなかったことを考えると大きな前進だといえます。

ところが、小学校の授業を参観した中学校の教師から「子どもたちは楽しく学習に取り組んでいたが、授業者が何を学ばせたいのかが明確でない」とか、「中学校は高校受験があり、ここまで時間をかけて指導することはできない」などの声が聞かれます。一方、中学校の授業を参観した小学校の教師は「教師が一方的に話すことが多く、生徒の発言がほとんど聞かれない」など双方から厳しい指摘がだされます。

このように、相互に不信感があります。こうした状況が生まれる背景には小学校と中学校に「学校文化」の違いがあることが考えられます。これが授業に対する関心や受けとめ方の違いを生み出しているようです。このような傾向は小学校と中学校の教員の人事交流の少ない地域で顕著にみられます。

小学校と中学校の合同による授業研究を実りのあるものにするには、両者に学校文化や指導体制の違いがあることを踏まえ、相互理解を深めつつ、各校種に合った授業のあり方を議論することが重要です。

ホップ・ステップ・ジャンプ

学校文化が違うなかで、小学校教師と中学校教師が授業に対して相互理解を深めることは難しいものです。小学校と中学校が合同して授業研究を実施するとき、ゴールを明確にしてホップ・ステップ・ジャンプを踏んでアプローチしていきます。人間関係を深めながら、それぞれの教師のもつ優れた授業技術を学び合うことが大切です。

まず、ホップです。ここでは実施する研究授業の教科について知ることです。例えば中学校の国語科の研究授業を実施するとき、中学校の教科書や学習指導要領の関連する項目を読むことで、教材や押さえるべき事項がわかります。他校種の教科書や学習指導要領を読むことは、相互に理解し合ううえで重要な「はじめの一歩」です。

次に、ステップです。ここでは、小学校と中学校の両者が協働して教材研究を行い、学習指導案を作成します。他校種の教師からの意見や指摘は日ごろ気づかないことが多く、参考になります。中学校の教師は専科であることから指導内容や教材に造詣が深く、小学校の教師は指導方法のアイデアに長けていることが多いようです。お互いのよさを生かしたいものです。

近年、学校の働き方改革もあって、集まって討議する時間がとれないという声を聞きます。この場合、パソコンなどでメールの交換を行う。オンラインで協議するなどが考えられます。いずれにしても両者を取りもつ連絡・調整役が定まっているとよいでしょう。

そして、最後のジャンプは合同による研究授業の実施です。授業者は多くの場合当該学校の教師が行いますが、次のような指導体制も考えられます。例えば小学校での授業を中学校の教師が行います。中学校ではこの逆です。この場合、免許状取得の問題があります。また、小学校と中学校の２人の教師がチーム・ティーチングで実施します。この場合、主になる教師と従になる教師が途中で入れ代わるなどさまざまに工夫することができます。

小学校と中学校の教師が合同で授業研究を行うときには、それぞれのよさに学びながら、同じ授業観、子ども観に立つことが大切です。こうした取り組みには、義務教育９年間を見通して子どもたちを育てるという重要な意味が込められています。

授業力の向上策

授業記録を録る

授業は子どもたちと教師による主に言語活動による共同作品です。それは一過性のものであり、時間の経過とともに瞬時に消え去っていきます。

授業の様子をカセットテープなどに録り、文字に起こす作業を「授業記録を録る」といいます。教師の発問や助言や子どもの発言はもとより、「えー」「どうしてだ」など子どもの驚きやつぶやきなども見逃さず聞き取り、丁寧に文字化します。発言者の名前や経過した時間（分）も書き入れます。話し合いが中心の授業の場合、１単位時間（４５分間）の授業に６～８時間を要することもあります。文字に起こすことは手間のかかる作業です。

授業記録を録ると授業の実態が見える化されます。これは「授業の事実」です。文字に起こす過程で、また記録を丹念に読み返すと、子どもたちは教師の期待や予想を越えた発言をしていたこと、教師が子どもたちの思考と無関係に助言していること、教師の発問の切り返しによって子どもたちの理解が一気に深まっていることなど、授業を実施していたときには聞き逃していた貴重な事実に気づかされます。

子どもたちの思考が促され、理解が深まる場面には何らかの契機があります。例えば、教師の助言、資料提示のタイミング、子どもの発言へのリアクションが効果的に行われたときです。

近年、学校の多忙化が指摘されており、授業記録をじっくり録る時間がなくなっていますが、授業記録を録り、分析することで、授業進行の考え方と技術を学ぶことができます。授業記録を録ることは授業力を向上させる重要な手だてだといえるでしょう。

教育時事 教育の動向

がん教育の実施状況

「がん教育」は、健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などが、がんと向き合っていることに対する共感的な理解を深めることをとおして、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質・能力を育成することを目的にしています。

中学校では保健体育科の学習指導要領解説に「健康な生活と疾病の予防」に関連して、「がんの予防」が示されています。小学校においても、子どもの発達段階や学校、地域の実態に応じて取り組むことが考えられるとしています。

文部科学省は、公立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校を対象に、令和７年度におけるがん教育の実施状況を調査しました。そのうち、小学校段階の回答校は１万９１１９校でした。

調査結果によると、「がん教育」を実施した義務教育学校、特別支援学校を含む小学校段階での実施状況は、体育科での実施が１万５７６校、特別活動での実施が１４０４校、その他が６７９校でした。実施しなかったのは７０３９校でした。

小学校等で外部の講師を活用して実施したのは４９６１校で、回答した学校の１４．９％でした。「実施した」と回答したうち、外部講師の職種は複数回答で、がん経験者（２２．７％）、薬剤師（１６．０％）、保健師（１２．５％）、がん専門医（１２．４％）の順でした。

連載 ミニ教育史 vol.1

学校給食

貧困児童の救済策として始まる

学校給食は子どもたちの心身の健全な発達と国民の食生活改善を目的に、学校での集団による主に昼食として実施されてきました。わが国で学校給食が最初に行われたのは明治２２年（１８８９年）。山形県鶴岡町（現在の鶴岡市）の私立忠愛小学校だとされています。経済的に恵まれない子どもたちに米飯が提供されました。困窮家庭の子どもを対象にした取り組みが全国に広がったのは大正の末期ごろです。

給食は、太平洋戦争で一時中断しましたが、戦後アメリカやユニセフなどからの脱脂粉乳の援助を受けて再開されました。そのもとになったのは、昭和２１年（１９４６年）にだされた文部省と厚生省と農林省の３省による通知です。これには全国のすべての国民学校（のちの小学校）において給食を実施し、子どもたちに栄養補給することが示されました。

昭和２９年（１９５４年）に学校給食法が制定され、学校給食の目的をはじめ実施に関する基本的な事項が示されました。その後、与える給食から選べる給食への転換もみられました。

平成１７年（２００５年）に栄養教諭制度がスタートし、美味しくて安全な学校給食を提供するとともに、学校給食を生きた教材として活用する指導が教育活動の一環として実施されるようになりました。給食指導は教育活動として教育課程に位置づいています。

今日、学校給食は、家庭と連携しつつ望ましい食生活や食習慣を身につける指導をさらに充実させるとともに、肥満傾向や偏食、食物アレルギーなど課題のある子どもには個別的な指導・対応することが課題になっています。

INFORMATION

教科別しあげ教材
1教科で1冊
○年へGO!

2･3年 国語･算数･漢字計算

4～6年 中1 国語･算数･理科･社会 漢字計算

ご注文は文溪堂代理店まで



「教育の小径」のすべてのバックナンバーを文溪堂ホームページからお読みいただけます。

お知り合いの先生にもお勧めください。

ぶんけい 教育の小径 検索

編集後記

「教育の小径」は、今月号より19年目に突入します。新連載の「授業力の向上策」や「ミニ教育史」も始まり、ますますパワーアップした教育の小径をお届けしていきます。先生方には、北先生の知見を、「ホップ・ステップ・ジャンプ！」で実践していただけたら幸いです。（M記）

ぶんけい きみの手に、みらいの夢を。

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発　　行：株式会社文溪堂
発 行 日：2026年11月1日

◎定期送付の学校や先生方へ　送付先・部数等に変更のある場合は、右記にご連絡ください。　株式会社文溪堂 営業部 営業企画課　FAX.058-398-2821　Eメール bunkeido@bunkei.co.jp

◎「ぶんけい 教育の小径」で検索すると、「教育の小径」のすべてのバックナンバーがご覧いただけます。